

EDTA 依存性の血小板凝集・血小板衛星現象・血小板貪食像を認めた一例

◎野中 拓¹⁾、鈴木 恵美¹⁾、鈴木 亜紀子¹⁾、佐藤 麻実¹⁾、田中 勇氣¹⁾、小池 椎¹⁾、大原 陽¹⁾、丸山 直子¹⁾
長岡赤十字病院¹⁾

【はじめに】EDTA 依存性の血小板凝集や血小板衛星現象は、自動血球計数装置で血小板数が偽低値を示す原因として知られている。今回、我々は、EDTA 依存性の血小板凝集と血小板衛星現象に加え、好中球と単球による血小板貪食像を認めた極めて稀な症例を経験したので報告する。

【症例】60 歳代、男性。前医での超音波検査と膀胱鏡で膀胱結石を指摘され、粉石手術のため当院を紹介受診した。

【検査所見】自動血球計数装置で EDTA 加血の血算を測定した結果、RBC 466 万/ μ L、Hb 15.0 g/dL、Ht 44.7%、WBC 6,090/ μ L、PLT 25.0 万/ μ L であり、血小板凝集を示唆するメッセージは表示されなかった。血液塗抹標本を鏡検したところ、好中球の約 50%、単球の約 5%で血小板貪食像がみられた。明らかな血小板凝集は認められなかったが、好中球の周囲に複数の血小板が付着した血小板衛星現象がみられた。6 時間後に血算を再測定すると、PLT 13.5 万/ μ L に低下し、血小板凝集を示唆するメッセージも表示された。凝固線溶検査に用いたクエン酸加血では PLT 23.4 万/ μ L であった。EDTA 加血の塗抹標本を作成し直すと、6 時間前と

比較して血小板の貪食細胞比率に明らかな変化はなかったが、血小板凝集がみられ、好中球の周囲に血小板がロゼットを形成し、血小板衛星現象もより明らかとなった。クエン酸加血の塗抹標本では血小板凝集・血小板衛星現象・血小板貪食像のいずれも認められなかった。【考察】既報によると、血小板貪食像を認めた患者の EDTA 加血から得られた乏血小板血漿を健常者の全血に添加すると、時間依存性に好中球による血小板貪食像がみられるようになり、他の抗凝固剤から得られた乏血小板血漿では貪食像がみられないことから、血小板貪食は EDTA 依存性とされる。今回、既報のような健常者血との混合試験は行っていないが、我々が経験した症例もクエン酸加血の塗抹標本では血小板凝集・血小板衛星現象・血小板貪食像のいずれも認められなかったことから、既報と同様に EDTA 依存性の血小板貪食と考えられた。【結語】末梢血塗抹標本で EDTA 依存性の血小板凝集と血小板衛星現象に加え、好中球と単球による血小板貪食像を認めた極めて稀な症例を経験した。
連絡先：0258-28-3600（内線 2307）